

特集

30 年 か ら の 一 歩

特集 学部長インタビュー

土屋 大洋／脇田 玲／武田 祐子

卒業イベントレポート

豊増 慧介／宮元 眺

連載 ようこそ、新任教授

小笠原 和美／塩田 琴美／田口 敦子／星田 淳也

わたしの推薦図書

宮代 康丈

No.
70

特集

02 30年からの一歩

04 学部長インタビュー

04 社会のリアルと向き合う政策
土屋 大洋（総合政策学部長・教授）

08 世界で唯一の環境情報学
脇田 玲（環境情報学部長・教授）

12 人を学ぶ看護
武田 祐子（看護医療学部長・教授）

16 卒業イベントレポート
豊増 慧介（環境情報学部2019年度卒業生）
宮元 眺（環境情報学部4年）

連載

20 ようこそ、新任教授
No.31 小笠原 和美（総合政策学部教授）
No.32 塩田 琴美（総合政策学部准教授）
No.33 田口 敦子（看護医療学部教授）
No.34 星田 淳也（総合政策学部准教授）

34 わたしの推薦図書
No.08 宮代 康丈（総合政策学部准教授）

36 慶應SFC学会

38 「KEIO SFC REVIEW」学生編集部員募集

40 From Editor

SPECIALS

学部長インタビュー

- 4 土屋 大洋 (総合政策学部長・教授)
- 8 脇田 玲 (環境情報学部長・教授)
- 12 武田 祐子 (看護医療学部長・教授)

卒業イベントレポート

- 16 豊増 慧介 (環境情報学部2019年度卒業生)
- 宮元 眺 (環境情報学部4年)

特集

！ 30年からの一歩 ！

1990年4月に開学したSFCは今年30周年を迎えた。
新型コロナウイルスへの対応など新たなチャレンジのまっただ中であるが、
問題発見・問題解決のキャンパスであるSFCが歩みを止めることはない。
次の30年、SFCはどこに向かって、どのように歩いていくのだろうか。
30周年の節目に総環看の新しい顔となった学部長たちの一歩、そして
今春SFCを巣立った先輩たちが残した一歩に迫る。





●挑戦し続ける学部

―土屋先生の考える「総合政策学部」とはどのような学部ですか。

三十年前、政策を学んだり、研究したりする大学院は世界中にありましたが学部レベルではほとんどありませんでした。世界でもほとんど例がない中で、一九九〇年に日本で初めて、学部で政策の研究をやり始めた点でSFCの総合

学部長インタビュー

キャンパス開設30周年を目前にした昨秋、総合政策、環境情報、看護医療の3学部の学部長が揃って交代した。各学部の過去、現在、未来、そしてキャンパスの将来像を、学部長たちはどのように捉えているのだろうか。土屋大洋、脇田玲、武田祐子の3学部長に語ってもらった。



社会のリアルと向き合う政策
総合政策学部長・教授 土屋大洋

政策学部は非常に画期的でした。それを三十年間積み上げてきていまも我々はリーダーで、新しい取り組みを世に訴えている存在だと思います。社会の目の前にある問題をどうやって解決していくかを考えなければいけないという面では非常にチャレンジングですし、決して完結しないオンゴーイングで挑戦し続ける学部ですね。

―土屋先生はどのような「総合政策学部」の確立をしたいとお考えですか。

総合政策学部は、社会の問題をリアルに扱う学部です。しかし、社会を扱うのは、ものすごくセンシティブで難しいことです。よく「社会実験」という言葉を使う人がいますが、社会で実験なんてしてはいけませんよね。社会の人々はモルモットではなく、一人ひとり

が人生を背負っており、社会の中でかけがえのない存在です。さらに、社会そのものもかけがえのないものですよね。だから社会の中で、こういう政策をやってみたらどうなるかな、などと簡単に実験できません。

総合政策学部というのは、簡単に実験できない課題に取り組んでいかなければいけない。非常に難しい環境の中で、答えを探すところだと思っています。

―総合政策学部に所属する学部生に求めることは何かありますか。

歴史は繰り返さないと、一般的には言いますが、その通りだと思います。しかし歴史に学ぶことは、たくさんありますよね。SFCは未来のことを語りたいという人が多いように感じます。それはそれでとてもいいことだと思うし、政

策を語るのには未来を考えることです。ですが過去のことを無視してできるかというと、そんなことはありません。過去を学ぶことは、基礎の学問を学ぶということに繋がる話なので、是非無視しないでほしいです。今までの経験や、学問の成果を無視せず、しっかりと過去を学んだ上で、未来のことを考えてほしい。リアルな世界で本当に何ができるかを考えてほしいです。政策を考えることは未来を考えることですから。

●自分の基盤を定める

―研究をする上で学生に気をつけてほしいことはなんでしょうか。

SFCは融合が、一つのキーワードですし、学際的であることが重要だと言われますが、それぞれが尖っていることも重要だと私は思います。学際研究って、割と皆さ



十六年だったのではないのでしょうか。最初の一九九〇年代前半のフイーバーが終わり、「SFCがやっていることはすごい」と、日本中の大学がSFCに追いつくようになってきました。我々は新しい目標をどこに置かかを考える時期を迎えているのではないのでしょうか。

―三十年後のSFCはどのようななっていると思いますか。

この先のSFCの未来が見える

とは言えませんが、別に総合政策学部とか環境情報学部が無くなっているでもないと思っています。三十年前というのは世の中が本当に動いた時代で、その時の新しいことを考えるための枠組みとしてこの二つの学部が作られました。そのあと看護医療学部や大学院政策・メディア研究科、大学院健康マネジメント研究科が続いてきました。東日本大震災にくわえ、新型コロナウイルスも社会に大きなインパクトを与えています。これからより大きな変化が起きるかも

―総合政策学部長として、最後にこのSFC REVIEWを読む読者の方々に一言メッセージをお願いいたします。

政策とは「言葉」で表現されます。もちろん政治的において指導者の態度や、風貌は重要な役割を果たすかもしれません。しかし結局のところ、言葉として語られるものが政策として作られていくため、言葉がとても重要だと考えます。SFC REVIEWというのは「言葉」が詰まった媒体なわけでは

土屋 大洋 (つちや・もとひろ)

総合政策学部長・教授
専門分野：サイバーセキュリティ、
国際関係論、情報社会論

(構成：飛弾 香花)

ね。言葉で表現することが必要とされる時代だからこそ、言葉がたくさん詰まった媒体の存在は重要です。是非、読者はその中に詰まった言葉を汲み取り自分の何かに役に立っているという姿勢を残しておいてほしいです。

※1…慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)は、藤沢市遠藤にある。この地域は豚や肉牛の飼育がさかんなため、その特有な匂いがキャンパスにまで届き、「臭いな」と感じる時がある。

―同じく新学部長である、環境情報学部長の脇田玲先生とはどのような関係性を築いていらっしゃいますか。

全く考え方が違うので、いろいろ調整をしなければいけません。政策・メディア研究科委員長の加

キャンパスの中にもっとベンチがほしいなと思っていました。たくさんベンチを散りばめて置いて、そこで皆がウダウダ喋りながら、「自分はこういう仕事を将来したい」とか「今、勉強でこういうところが行き詰まっている」とか、実際に交流ができる空間を作りたいなと思っていました。顔を突き合わせながら話すことをもっとで

●三十年の変化、そしてその先
―SFCは今年で三十周年を迎えます。二〇〇四年に着任された土屋先生が、この十六年を振り返った際に、SFCはどう変化していったと思いますか。

二〇〇四年頃というのはキャン

パスができてから十四年ぐらいで、草創期のスターの先生たちが多くいました。今はそれから十六年が経ち、世代交代が起きています。新しいスターが出てくることも重要ですが、また、我々の実績が問われる時期も訪れています。そこを踏まえた上で、総合政策学部をもう一度、どのように作り直していくかを考えなければならな

ん簡単に言います。しかし、一人ひとりがそれぞれの学問・分野で一人前になってないと、ダメなのです。こっちもかじり、あっちもかじり、中途半端なものを組み合わせ何かがやろうとするより、自分のベースはこっちだと。自分の学問分野を発展させていくためには、こっちも必要だ、これも必要だときちんと見えた上で、学んだ方がいいですね。ですから、総合政策学部、環境情報学部、それぞれのアイデンティティーをしっかり持った方がいいと、思っています。

―土屋先生が考える、理想のキャンパスの姿などがあれば教えてください。

キャンパスの中にもっとベンチがほしいなと思っていました。たくさんベンチを散りばめて置いて、そこで皆がウダウダ喋りながら、「自分はこういう仕事を将来したい」とか「今、勉強でこういうところが行き詰まっている」とか、実際に交流ができる空間を作りたいなと思っていました。顔を突き合わせながら話すことをもっとで

きるといいなと。その時に傍に座って「うん、うん」と話を聞きながら、「ああいうのはどう」とか「こういうのもあるよ」とか言えるようなキャンパスを作りたいなと思っていました。ですから、慶應大学本館前のバス停を降りたところにベンチ作ってくれませんかとお願ひして設置してもらいました。コロナ禍が終わったら、あそこにぼーっと座って「ああいいキャンパスだなあ。綺麗だなあ。でも今日はちよつと臭うなあ※1」みたいなことができるのでいいなと思っています。



世界で唯一の環境情報学

環境情報学部長・教授 脇田 玲



©Shunichi Oda

●世界のすべてと向き合う
—脇田先生の考える「環境情報学部」について聞かせてください。

この世界のすべてと向き合っていくこと。それが私の考える環境情報学です。SFCのガイドブックには以下のように定義されています。自分の身の回りのもの全てが環境であり、それらとやりとりされるものが情報である。自分の周りのものというのは、自分が知覚しうる全てのもの、想像しうる全てのものです。それらを分析したり、記述したり、統合させたりすることで、よりよい世界をデザインしていく、それが環境情報学だと思います。環境という言葉は何も自然だけを指すのではなく、身の回りのもの全て、この世界全てを指すのです。だから、SFCにはさまざまな分野の研究者がいるし、個々の研究者も複数の研究を実践しているのです。向き合う

という意味では、研究や教育だけでは不十分で、法人をつくって社会実装をする必要も出てくるでしょう。一つの領域に閉じこもって問題解決できないので、コラボレーションも必要です。

サイエンスという言葉は「科学」と日本語化したのは西周だと言われていますが、同時期に福澤先生は「実学」という言葉をあてはめました。「科」とは「細かく分かれたもの」という意味で、サイエンスはすでに細分化された状態で日本に輸入されたのです。しかし、現実問題と向き合っていく中で、単一の学問で社会問題を解くことは難しく、分野間のコラボレーションや産官学を行き来した活動が求められる時代になり、その流れからSFCが開設されました。SFCはそのような意味での実学の間でもあります。

—環境情報学を紐解く要素として、デザイン・アート・サイエンス・テクノロジーの関係をどのようにお考えですか。

SFCのWebサイトにも書きましたが、デザインが薬だとすれば、アートは毒です。薬はQOLを向上させる上で欠かせないものです。一方で、お酒や夜遊びといった体に悪いもの時には必要で、それらは人間性と切り離せない存在です。そして、テクノロジーが欲望だとすれば、サイエンスは謙虚さです。技術によって自身を拡張すること、その欲求から我々は逃れることはできません。一方で、世界を知りたいという知的欲求も同時に私たちは持つていて、世界を知れば知るほど謙虚になることができます。現代において創造的であるということは、この四つを駆使する力を持つていることなのです。これらの要素をホーリスティックにかつ横断的に学べる場所

は世界中でSFCしかありませんし、環境情報学部しかありません。

●「未来」はどこから生まれるか
—SFCに在学中の経験で特に学びとして大きかったことや、自身の活動に影響を与えていることはありますか。

学部四年生から博士号を取るまでの間、元環境情報学部教授の千代倉弘明先生の研究会に所属していました。研究会という空間はその後の自分の人生に大きく影響してきます。千代倉先生は三次元CAD[※]の世界的な研究者で、先生を慕って研究会には天才的な学生が集まっていました。先輩や同級生から多くの刺激を受けました。その前には、同じく元環境情報学部教授の有澤誠先生の研究会にも所属していたのですが、ここもまた刺激的な場所でした。「他者」とは自分とは世界観も価値基準も

まったく異なる存在で、そういう人々が集まってからうじて社会は成立している。そういう気づきを与えてくれた場所でもありました。

—「何をするか」だけではなく、「どこに身を置くか」が大事ということでしょうか。

千代倉先生は、シリコンバレーの人材を例にしながら、どこに身を置くかこそが大切だというお話をよくしてくださいました。何をするかももちろん大事ですが、一方で、どこに身を置き、誰と過ごすかというこの方が大切なのではないか、という話です。その後、私もこの話を実感する経験を持ちました。博士課程を終えた後、自分で会社を作り、同時に建築家やデザイナーの友人たちと一緒に西早稲田にシェアオフィスを持ちました。「SynC」という名前のスペースで、そこに集まった人たちは今では建築、デザイ



©Suguru Saito / Red Bull Music Festival Tokyo 2017

にあたります。SFCの学生たちは、「未来からの留学生」と呼ばれていますが、今、この場所が未来を作る場所なのか、十年後、二十年後にここから未来が生まれるのか、そういう意識を持って生きていくと良いかもしれないですね。

―同じタイミングで新学部長に就任した土屋大洋総合政策学部長とは、どのように協力しながら学部運営をしていますか。

ン、アートの世界で大活躍しています(メンバーの具体名は出せませんが、実は松川昌平先生(環境情報学部准教授)はSynicの中心メンバーでした)。私が居たのはわずか一年くらいでしたが、そこには何かがあった。過ごした空間の中で育まれるものの中に、何か大切なものがあつたのです。未来というのはそうやって作られているのだと思います。そんな場所が世界には確実にあるのです。漫画の場合はトキワ荘コンピュータカレッジの場合はユタ大学のCG研究所などがそれ

土屋さんは、あらゆるリスクを想定して、それ的に確に反応していくタイプの人です。その正確さや実務能力の高さという意味でイービス艦のような人ですね。加藤文俊さん(政策・メディア研究科委員長)は、SFCの三十年の歴史を最初からご存知で、その経験に裏打ちされた助言を的確に出してくれます。長老のような人です。イービス艦と長老がいれば安

定した組織運営が可能です。だから私自身は、大学のあり方を再解釈するような立場で、言いたいことを言い、やりたいことをやる、学部長になってもアーティストをやっているわけです。

●SFCと変化

―三十周年を迎えたSFCが向き合う最大の課題は何でしょうか。

スターを作り出すことだと思います。開設から三十年はインターネット文明とグローバル化という世界を描き、日本の教育と研究を引っ張ってきました。今や多くの素晴らしい卒業生が社会のリーダーシップをとり、SFCがやってきたことが間違いではなかったことが証明されました。その背後には、分野をリードするスター研究者の存在がありました。インターネットの父と呼ばれる村井純慶應

義塾大学教授とバイオインフォマティクスの世界的研究拠点を作り上げた富田勝環境情報学部教授はSFCから生まれたスーパースターですが、彼らがここ数年で退職を迎える(迎えた)ということは、一つの時代の終わりを象徴しています。次の時代のスター研究者を戦略的に作り上げていくことが、これから十年ほどの課題になるでしょう。それは次の時代のビジョンを描くことと同じことなのです。

―三十年後のSFC、その未来をどう描きますか。

開設から三十年間作り上げてきた情報化とグローバル化という物語は一つの終わりを迎えようとしています。もちろん、SFCは社会を変えましたから、ハッピーエンドですね。その後の三十年は、また別の物語になることでしょう。折しも、新型コロナが出てきて、

が、納得して死ぬために、今をどう生きるかを考えてください。多くのリーダーが困難な時代を生き残ろう、みんなで乗り越えようという強いメッセージを出していますが、それ以上に今をどう生きるかが大切なのではないでしょうか。勘違いしないでほしいのは、好き勝手に利根的に生きれば良いということではなく、最後に納得して死を迎えるためには自分の思想を持つ必要があるということです。

「サバイブ」と同時に「アライブ」ということも考えてほしいのです。これはコロナ禍の生活だけではなく、就職活動、その後の生き方にも関わってきます。我々はよりよく生きるために学ぶわけですし、システムに盲従することなく独立と自由を得るために知性が必要なのです。そのために大学で学んでいることを忘れずに。

※1…三次元CADとは、設計や技術ドキュメントの作成に伴う手作業での作図を自動化するテクノロジーのこと。(AUTODESK web ページより引用)

(構成…飛弾 香花)



脇田 玲

(わきた・あきら)

環境情報学部長・教授

専門分野: ビジュアライゼーション、幾何モデリング、スマートマテリアル

©Yusuke Kashiwazaki / Red Bull Music Festival Tokyo 2017

ちよつと怖い話かもしれません

―最後に、今、一番学生に伝えたいことは何ですか。

―最後に、今、一番学生に伝えたいことは何ですか。

人を学ぶ看護

看護医療学部 部長・教授

武田 祐子



●看護医療で人を深く学ぶ

―武田先生が考える看護医療学部とはどのような学部でしょうか。

人を深く理解して学んでいくことを基盤にして、その面白さを学び、またそれを社会に還元できるような人を育てていく学部でありたいと思っています。看護医療では、身体的側面だけではなく、心理・社会的側面など、人を良く知ることができ非常に面白い学問を学ぶことになります。看護医療学部を受験するみなさんの中には、今後の自分のライフワークのために、看護師や助産師などの専門的な力を身につけたいと思ってこられる方もいますし、「看護医療学部」という響きの中に何かしら医療というものに関心をもって入られる方もいるでしょう。では「看護」の本質は何か。その答えは多種多様であり、これが正解ということではないように思います。正解が分

からないからこそ、看護を学ぶことにより、看護を非常に狭い専門職と考えていた方も広い意味での看護の面白さに気づいてくださるのではないのでしょうか。看護を学んだ皆さんには、その学びを生かして多様な形で活躍して欲しいです。

―人を理解するために大切なことは何でしょうか。

まず、相手に対して深い関心を持つことが大切です。人の心と体は非常に密接に関連していて、さらにそれらを社会的な存在として捉える必要があります。そこをしっかりと理解しないと、本当の意味でのケアを提供するのは難しい。そのことを学んでほしいですね。

―病気を治療するためのサポートをするだけでなく、その人を全体として理解しながら、寄り添うのが大事なのではないでしょうか。

そうですね。もちろん医学では治療という手段を使って治しますが、どんな治療であっても、本来その人が持っている力を十分に発揮できなければ、治療の効果が表れないと思っています。私たち看護師は、薬を使うとか手術をするなど直接治療はしませんが、その人が持っている力を最大限に引き出すためのサポートをする存在だと思っています。

―看護医療学部に通っている学生に身につけてほしい力はあるですか。

ホームページにもあるように、看護医療学部では「五つの力」を挙げています。五つの力を簡単に説明しますと、まずは基盤的な能

力である「人間力」、二つ目は「専門的な能力」、そして看護は医療や社会と連携していかなければならないので「連携・共同する力」が三つ目、そして四つ目は「国際的に活躍できる力」、最後に「変化を起す力」です。中でも、私自身は「人間力」が最も大事な基盤だと感じていますし、看護教育を担当している教員はその部分を大事にしていると思います。「人間力」とは、人のさまざまな反応を深く

学ぶ中で習得できる力です。非常に多様な人たちがいるSFCで共に授業を受けるだけではなく、サークル活動やアルバイトをするなど、複数の活動に参加することにより、幅広い年代層や社会的背景を持つ人との関わりを通じて人間力は養われます。その際、相手を理解し、尊重し合うのが重要です。総合大学である慶應義塾大学において、SFCのように非常に多様な学問があり、多様な目的をもって集まる人たちとの交流は、看護医療学

部の学生が人間力を養っていくうえでとても大切でしょう。

―「人間力」を身につけるためにはさまざまな人との交流が大切なんです。そうした活動と、一人で行う勉強を両立させるには何が重要だと考えていますか。

メリハリが重要だと思います。何かに集中しないといけない時はありますが、そこで集中してやるからこそ、ほかのことに対して自然と意欲がわいてくると実感しています。やるべきことにおわれりと切羽詰まり、両方が中途半端になってしまう時もあります。そうなるとうるぎうとして、人間力どころではなくてしまおう。しかし、そのような自分も認め、きちんと自分の状況を客観的に見ているようにしています。その弱さを認めるのは辛いかもしれないけれど、そのような時は一息ついて、



周りの人たちに話をしてみたり、違う環境に入ってみたりすると、辛さが軽くなるときもあります。コロナウイルスの影響で外出自粛やオンライン化が進み、一人でいる時間が長くなりますが、WEB飲み会やWEBお茶会などで息抜きをして人と話してみると、今までとは違った見方をできて気持ちも楽になりますね。

●看護医療学部の過去、現在、そして未来へ

―学部開設時からこれまでの二十一年間で、看護医療学部で生じた変化はありますか。

二〇〇八年に薬学部も開設され

た結果、医療系三学部の先生方が一丸となって、各学部の持ち味、特殊性、強みを考えるようになったのが、この二十年の中での一つの大きな変化だと感じています。チーム医療を行う上では、医療に携わる人同士の連携が大事です。そこで薬学部開設後、医療系三学部にて合同教育を始めました。学生時代から意見交換を行い、これからどのような専門性を持つている人と共に働くのかを理解することが、チーム医療を本質的に充実させる上で役立つと考えています。初期の段階である大学一年生の時には、各自が自分の学問を学び始めて間もなく、自分が今後専門としていく分野を見つけられていません。そのため、講師の先生にその時の社会状況などを踏まえて一つのテーマを設定してもらい、それに関連した内容をグループディスカッションして発表します。最終学年の時には、自分の専門性を学んできた段階になるので、模範

患者さんを設定し、その患者さんに対して今後どのような治療・ケアをしていくかを医療チームとして話し合っていきます。その中で、医学部の学生は治療効果の側面から最善の選択を提案する一方、看護学部の学生は、治療効果だけでなく患者さんの社会的な背景を考え、治療と仕事の両立はできるのか、高齢の方であれば本人だけでなく家族の協力が必要なのではないかと提案していきます。一方、薬学部の学生は、同じ薬に対して、患者さんの生活に合わせてどのような効果の出方や形状が良いのかを提案してくれます。今までの医療界では生存率を上げること、価値が置かれていたものの、今日はそれに加えて患者さんのQOL (Quality of Life 生活の質) の高さも重視されるようになっていきます。このプロジェクトを通じて、自分たちの専門性だけでは限界があることも、チームで考えることで、その患者さんの真の健康

や、満足感や納得感を持つて生活をするためのゴールと一緒に考えられるようになっていくのです。(参考URL: <http://ipe.keio.ac.jp/index.html>)

―現在の看護医療学部の状況を踏まえ、今後に向けて変えていきたい部分はありますか。

看護医療学部にはとても必修が多いですから、総合政策・環境情報学部生のように一年次からプロジェクトに入るのはなかなか難しいと思います。だからこそ、いかに学部生の段階から研究に参加できるかが現在の課題になっています。病院での実習なども多いため、二キャンパス(看護医療学部のキャンパスと総合政策・環境情報学部のキャンパス)を行き来しながら学習するのは現実的に難しいです。しかし二キャンパスにわたること、をデメリットにするのではなく、逆にそれを生かしてどのように豊

かに学んでいけるかを考えて実践することが重要です。この二キャンパスの中でカリキュラムの過密さを解消するとともに、必修だけにとらわれず多方面にわたって学習できる方法を考えていきたいですね。一生懸命教育をするのはもちろんですが、学生自身が今やっている勉強を他者に伝え、将来教育に還元していきたいと思えるよう、私自身も実践と研究に力を入れていきたいです。

―看護医療学部の二十一年間にわたる歴史についてお話を伺いたが、反対に二十年後の未来ではどのようなようになってほしいと思いますか。

長いようであつという間だった二十年の中では、新型コロナウイルスの世界的大流行のように、現実かと疑うような出来事が国内そして世界で起きています。看護で大切なのは「人を深く学ぶこと」

と言いましたけれども、このような出来事を通じて、平常時には見えない人々の反応を捉えることができ、人を深く理解する上で役立つ学びがたくさんあると思います。

学部誕生から三十年経った総合政策学部・環境情報学部では、SFCを巣立った多くの方々が教員として活躍されています。特に学部長や研究科委員長である三人の先生方からは、「三十年経つと少し変わってきている部分もあるけれど、開設当初のSFCらしさや当時大切にしていたものを肌身で感じ、もう一度その頃に立ち返って頑張ってみよう」という気持ちで伝わってきます。今ようやく看護医療学部でも、卒業生が教員として戻ってきてきていますが、おそらくあと十年二十年経てば、SFC二学部のように、卒業生が教員としても重要な役割を担っていくと思います。教員となった時には、自分たちが学んだことは何だったのかをしっかりと振り返り、何

を大切にしていきたいのか考えながら、さらに看護医療学部を発展させてほしいです。

●SFCがもつ力

―今のお話は看護医療学部生に対するメッセージにも近かったと思いますが、SFC REVIEWの読者の方に向けてのメッセージをお願いします。

今お話した中にも出てきたように、過去のSFCの学生たちは、自分たちが学ぶと同時に、そこでの発見を社会にどのような形で還元していくかを常に考えながら発信する力も養っていました。看護医療学部の卒業生が社会的な活動にも積極的に取り組んでいる背景には、SFCでの学びがあるはずです。SFCには、学んだ内容を実践につなげようと思ったときにサポートしてくれる教授陣もたくさんいますし、蓄積されてきた知見も最先端のIT技術もあります。



武田 祐子

(たけだ・ゆうこ)

看護医療学部長・教授
専門分野：臨床看護学
(成人看護・遺伝看護・がん看護)

(構成：芳賀 瞳子)



2019年度卒業生
豊増 慧介さん

●感化されたSFCの授業と教員の言葉
— 学生生活を振り返って心に残る経験を教えてください。

豊増…一年時に受講した「未来構想ワークショップ」です。授業内で企業の方から与えられたテーマをもとに、グループで企画を構想したことが印象的でした。同じグループの先輩から刺激を受け、勉強になることばかりでした。思い返してみると、この経験が今の自分の基盤となっています。

宮元…入学直後に受講した「総合政策学」の「政策コーカス」※1が印象的です。最初の講義で「政策コーカスのリーダーに挑戦したい人は、来週壇上で喋ってください。」と発表がありました。入学早々、大勢の前でプレゼンすることに大きな衝撃

を受けました。悩んだ末、五〇〇人もの前で喋る機会は今しかないと思い、リーダーに立候補しました。当時出会った人とは今でも繋がりがあり、そこから派生してさまざまな人に出会うことができました。もし当時「政策コーカス」でリーダーに挑戦しなければ、きっと今とは違う大学生活を送っていたと思います。

豊増…また、先日宮元と二人で、入学後に行われたオリエンテーションの事を思い出しながら、村井純先生（慶應義塾大学教授）の言葉に衝撃を受けたことを話していました。SFCの学生には入学時点で既に活躍している人がいる中で、村井純先生の「隣の席にいない人ができることを自分ができる人ではない。その代わり隣の人と仲良くなれ。そして隣の人ができないことを自分ができるようになる。」という言葉に「それなら何か自分にもできることがあるかもしれない」と大きく心が動かされたのを覚えています。当時、宮元も同じ言葉に感化されていたというのを、一緒にイベントをつくるなかで知って、なん

だか感慨深かったですね。

●「多様性」と「問題発見・解決」の宝庫
— 学生生活を通して感じた「SFCならではの良さ」とは何でしょうか。

豊増…多様な人々とのように協力したら良いのかを学べるところです。SFCはマニアックでユニークなことをやっている人もいれば、スキルは持っていないけれどすごく立ち回りがうまい人など、多様な人がいる大学だと思います。私は、グループワークの授業をたくさん履修したことで、多様な人々との協力について考えることができました。

宮元…私は理念として「問題発見・解決」を掲げているキャンパスにもかかわらず、キャンパス自体に問題が山積しているところが良いと思います。例えば、バス列が長いところや昼休みがないところ、縦と横の繋がりが弱いところなど、まるで学生のために用意されているのかと思うほどたくさん問題を抱えています。それらに対する学生の反応もさまざま、このキャンパスには

●それぞれの「SFCらしさ」を表現する場に
— 今年のファイナルプレゼンテーションのテーマは「SFCらしい卒業式」と。このテーマに決めた過程を教えてください。

宮元…ファイナルプレゼンテーション

豊増…特別研究プロジェクト「琴坂研究会×コニカミノルタ株式会社」※2に参加した際のチームメンバーに、前年度ファイナルプレゼンテーションの幹事を務めていた方がいて、声をかけてもらったのがきっかけでした。

宮元…私がつくったタクシーの相乗りアプリ「taxi」をファイナルプレゼンテーションの前年度代表の方が使用してくれていて、連絡を頂きました。昨年のイベントの様子を見て、主催したいと思っていたので「やります!!」と即答しました。



卒業イベントレポート

インタビュー

環境情報学部2019年度卒業生 豊増 慧介
環境情報学部4年 宮元 眺

2020年3月、SFC Final Presentation（以下、ファイナルプレゼンテーション）とTake Off Rally（以下、テイクオフラリー）という2つの卒業イベントがオンラインで開催された。新型コロナウィルス感染拡大のさなか、多くの困難に直面しながらも、どのような思いで卒業イベントを実現したのだろうか。それぞれの運営代表を務めた、豊増慧介さん（環境情報学部2019年度卒業）と宮元眺さん（環境情報学部4年）にお話を伺った。

社会の縮図のような面白さを感じていますね。

豊増…歴代の学生を集めて「総合政策学」の「政策コーカス」を開催してみたいです。そこで生まれたアイデアを大きく形にできたら面白くなると思います。

宮元…みんなが挑戦したいことに純粋に打ち込めるようなSFCにしたいので、もし私が歳を重ねて学部長になったら、あえて何もしないと思います。それは若い人たちの方が、未来が見えていると思うからです。ただ、責任を取って背中を押せるような学部長にはなりたいですね。

豊増…そのためには企業と協力して、学生が活躍できる場をさらに増やす仕組みがつくれたらいいなと思います。そうしたら、よりSFCの学生が社会で活躍できるはずですよ。

—もしお二人が今学部長だとしたら、30周年にどのような行事や政策を行いたいですか。

豊増…最後に後輩や未来の後輩に向けてメッセージをお願いします。



宮元 眺さん (環境情報学部 4年)

んは今回で二年目のイベントです。そのため今回次第で、今後継承されるか否かが決まるだろうと思っていました。どのようにしたら来年以降も柔軟にイベントが企画されてゆくだろうかと考えるなかで、「SFCらしい」という言葉が浮かんできました。以前から「SFCらしい」という言葉はさまざまな解釈をもつものだと思っていました。語る人によって異なる「SFCらしさ」を通じて、卒業生それぞれが



イベントに向けて作業中のお二人

自分を表現する場になるといって考え、このテーマに決めました。今後、このイベントが続くかも含め、過去にとらわれないでつくってほしいです。

豊増…意外にも社会に出ると、「SFCらしさ」を前面に出すことは求められていないということと自分の経験から知りました。決して「SFCらしさ」があることが悪いのではありません。心に秘めることはとてもいいことだと思います(笑)。今回登壇してくれた卒業生十六名は「SFCらしさ」を除いても何かが残る人たちでした。後輩の皆さんにはぜひ、もし自分が十七人目の登壇者だったら、何を話すだろうか考えてみてほしいです。

●卒業イベントの二週間前にオンライン配信を決定

—今年はファイナルプレゼンテーション、テイクオフラリーとともに、オンライン配信になりましたが、どのように決断したのでしょうか。

宮元…三月に入った頃、世間の大規模イベントは新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため、軒

並み中止になっていました。ファイナルプレゼンテーションとテイクオフラリーも、開催するか否か直前まで悩みました。しかし、二〇二一年三月の震災の年にオンラインで卒業式が行われたことを思い出し、オンライン配信という選択肢を検討しました。ファイナルプレゼンテーションの登壇者に開催の可否を相談してみると、登壇者のひとりに機材やオペレーションに詳しい人がいて、オンライン配信を手伝ってくれることになりました。さらにありがたいことに、他の学生も個々の強みを生かして、力を貸してくれることになったのです。特に同級生の醍醐旭裕さん(環境情報学部四年)には、技術面で大変お世話になりました。学生だけでなく、教員の皆様にも短い期間のなかでご尽力いただきました。心から感謝しています。

豊増…そうですね。とりわけテイクオフラリーでは、教員の皆様に卒業生へのメッセージ動画を募集したところ、快く引き受けてくださいました。オンラインでの実施を決断した時



醍醐 旭裕さん (環境情報学部 4年)

点で、本番まで残り二週間しかない状況でしたが、互いにフォローしあい個々が精一杯動いたからこそ実現できたこと感謝しています。例えば、運営から指示ができていなかった際に、司会者二名の動きを他の司会経験豊かな学生がフォローしていたのを見たときは本当に感動しました。結果的により多様な人を巻き込むことができたことでクオリティも磨かれ、前年とはまた違う形で開催できたと思っています。

●さらに挑戦、活躍ができる場へ

—今回のSFC REVIEWのテーマは「三十年からの一步」です。未来のSFCがどのような形になっているかと考えていますか。

宮元…挑戦したいことに自由に挑戦できる環境になってほしいです。

※1…二〇二〇年春学期まで、総合政策学部必修科目の「総合政策学」にて行われていた。あらかじめ設定されたテーマをもとにコーカスリーダーが政策を立案する。政策内容に関心を抱いたメンバーでチームを編成し、プロジェクトを行っていく。

※2…春期特別研究プロジェクト二〇一八で行われた、琴坂研究会とコニカミノルタ株式会社の共同プロジェクト。SFCの学生がチームを編成して、電気機器メーカーのコニカミノルタ株式会社が持つ技術やナレッジを活用しながら、新たな事業を提案する。

(構成…山田 璃々子)

リーダーのすゝめ

リーダー経験豊富なお二人に、リーダーを務める時に大切にしていることを伺いました。

- ・オーケストラの指揮者のようにチームメンバーを編成する
- ・チームを作るところから担っている以上、全責任は自分にあると考える。そのためにオーケストラの指揮者のように、チームメン

豊増 慧介 (とよます・けいすけ)
環境情報学部2019年度卒業生
株式会社レイヤーズ・コンサルティング 勤務
神成淳司研究室元所属
「Take Off Rally2020」運営代表
学生時代にはダンスに励み、2000人規模のダンスイベントを主催した。

宮元 眺 (みやもと・のぞむ)
環境情報学部4年 村井純研究室所属
「SFC Final Presentation 2020」運営代表
NPO法人湘南藤沢Projectsの代表を務めたり、SFCまでの相乗りタクシーアプリ「taxi」をリリースした。

バーがどの役割を演じられるかを慎重に考えます。

- ・集まったチームメンバーの特性を活かしてどの方向に舵をとるか考える

メンバーはプロジェクトの目的に共感して集まってきました。だからこそしっかりと目的地を決めて、メンバーを導くのがリーダーの仕事だと考えています。このチームなら何ができるのだろうか常に考えて行動することが大切です。

の後、警察官として重ねた経験が
つながりました。マジョリティと
して考えられている男性側の視点
だけではなく、このような現場に
女性が入っていくことでいろいろ
なものが見方が生まれ、それに
よって恩恵を受ける人がたくさん
出てくるということに気がついた
のです。ここは日本の社会でもの
凄く伸びしろのあるところ。ジェ
ンダーだけでなく、障害のある方・
外国の方などへの視点を向けてい
くダイバーシティの考え方が必要
です。いろいろな人の視点が入っ
ていくことで、今よりもより多く
の人が、より良く感じられるよう
な社会にできる。この伸びしろを
伸ばしていくのが、若い人たちの
力だと思っています。自分はそれ
を応援したいし、一緒にやってい
きたい。せっかく今警察という枠
から出ているので、このSFCに
いる限りは自分なりに与えられる
刺激は与えたいし、学生たちから

の刺激もたくさん受け取って自分
自身も視野を広げて学びたい。そ
してさらには共に作り上げたもの
を、実際に動く装置として社会に
入れ込んでいくようなことができ
たらいいと思っています。
**先生のご専門についてお聞かせく
ださい。**
研究の専門はありませんが、仕
事を通じて個人的に関心をもって
取り組んできたのは、性暴力対策
です。犯罪が発生したら事件の全
容を把握して加害者に犯した罪に
見合う罰を与えるということが警
察の務めです。しかしこの分野は
それが一番できていない。犯罪が
発生しているにもかかわらず、被
害者が言い出しづらいために、被
害を把握できないというジレンマ
に陥っています。これまで、性被
害に遭った方が相談しやすい場を
作ることや、警察に行くのを躊躇

する人でも医療機関等で必要な証
拠を集められるようにするための
証拠採取のキット開発など、医療
関係者の方々を中心に協力をいた
だきながら取り組んできました。
こうしたことは警察だけではでき
ないことで、各方面の方々に協力
してもらわなければ難しいです
ね。今は子どもに知識と勇気を与
える加害・被害防止の予防教育に
力を入れていて、「プライベート
ゾーン」を教えるための幼児向け
の絵本を制作中です。
**研究会ではどのような活動をする
予定ですか。**
私は警察庁から派遣されてきた
教員として七人目で、歴代の研究
会を二つ引き継いでいます。社会
安全政策論研究会とサイバー・防
犯ボランティア研究会です。後者
については、昨年までは、小・中・
高に学生自身が出向き、子どもた

ちにネットリテラシーを伝えると
いう教育ボランティアを行ってい
ました。春学期はコロナウイルス
の関係で訪問先の学校が休校にな
りできなくなっていました。その
が、こんな状況だからこそ、子ど
もたちもオンラインの時間が増
え、まさに今こそネットリテラ
シーが必要だと考えています。し
たがって我々も、オンラインも含
めて新しいやり方を、柔軟な頭を
持った学生たちと共に考えていこ
うとしているところです。
**先生は特殊詐欺被害の対策にも注
力されています。現在、新型コロナ
ウイルス感染症の感染拡大に乗
じた詐欺が増えているようですが、
その状況をどう考えますか。**
コロナというのは、詐欺グルー
プにとって一つのネタにすぎませ
ん。犯罪グループは電話やメール、
はがきなどを使ってターゲットの

Welcome!

ようこそ、新任教授

個性豊かな教員が集まる SFC に、
今年度もさまざまな専門性や経験を持つニューフェイスが着任した。
4 月から仲間に加わった 4 名の教員に話を聞いた。

No.31 インタビュー
小笠原 和美
(総合政策学部教授)



→ P20

No.32 インタビュー
塩田 琴美
(総合政策学部准教授)



→ P24

No.33 インタビュー
田口 敦子
(看護医療学部教授)



→ P28

No.34 寄稿
星田 淳也
(総合政策学部准教授)



→ P31

連載 No.31 インタビュー

既成概念にとらわれず、 何を為すか考えよ

小笠原 和美 (おがさわら・かずみ)

総合政策学部教授
専門分野：社会安全政策、性暴力、被害者支援、
ジェンダー

●多様なフィールドで活動し続ける原動力
小笠原先生は、この3月まで警察
庁に勤務されていたらしいまし
た。警察官から大学教員へとなり
大きな転換期を迎えた今、どん
なことを考えていらっしゃるす
か。
私が最初に警察官として現場
勤務をしたのは一年目の兵庫県警
でした。そこで経験したのが阪神・
淡路大震災で、その時「検視班」
という班に配属されて、火事が一
番酷かった神戸市長田区の遺体
安置所で検視の補助と遺族対応
をしていました。そこで初めてご
家族の亡骸を目にするご遺族に
接しながら、市役所や医師、警察
その他のたくさんの方の立場の人た
ちが協力し合っているのが現場だ
ということを体感しました。その後
二〇一一年に東日本大震災が起き
た時に、当時感じたこと、またそ



重要です。

●**集団と個人を分けて捉える視点**
ジェンダーに関する授業も担当されていますが、学生に期待していることはありますか。

まずは、無意識につくられてき

いことですね。

●**「どこにいるか」ではなく、「何を為すか」を考える**

総合政策学部の学生たちへメッセージをお願いします。

もつと先生方に興味をもって、視野を広げるように勉強することですね。この状況の中、オンラインでやり取りしなくてはいけない状況で余計に感じることもありま

総合政策の分野の先生たちだけでなく、環境情報の先生たちにも同じように関心をもって、どんなアプローチしていくかと思っています。二つの学部の間には垣根はありません。ただ、「総合」とは言いつつも、どこかに自分の根になるような勉強の仕方や分野を身につけた方が良いでしょう。自分は学生の時にバブルがはじけて民間の就職がとても大変な時でしたから、「そうだ、試験受け入れられ公務員って手があったじゃん」(実際は違いました(苦笑))と、安直に公務員の勉強を始めましたが、実は大学二年の時に司法試験を受けようと思い法律の専門学校

た見方や考え方に気づくことからだと思います。例えば、痴漢に關して言うと、大きな括りで言えば男女で認識が全然違います。日々の服装の選択で何を気にするかなど、日常生活の意思決定の中で無意識にやっている行動選択が、実は性別によって結構影響を受けているのです。そのような無意識に影響を与えている悪環境を含めて、性別にとらわれている現状を変えていけるのは若者だと思

小笠原先生はSFCのご出身ですが、学生時代の思い出はありますか。

ここ最近の日本の教育では、基本的に男女が同等に扱われることが増えました。少し前の年代だと、性別ごとに学校で習う教科が違ったり、男子がグループの長になったりと、どうしても性による役割が刷り込まれていました。だいたい時代が変わってきました。「女性だから、男性だから」というバイアスにとられない発想ができるのは、若い人たちに期待しているところです。集団間の違い

私はSFCの一期生でしたので先輩がいまいませんでしたが、慶應の「三田会」という縦のつながりがとてもいいと思っていました。父親も慶應でしたので、それを垣間見てきたところもあります。なので活動が活発な三田・日吉のテニスサークルに入って、二限が終わったら「じゃあー」と足早に練習に行っていました。当時はサークルを一生懸命やりすぎました(笑)。あと、公務員試験勉強のた

に行つてダブルスクールをしていたことが功を奏しました。それからSFCで問われ続けた「問題発見の力」は、のちに国家公務員という法律の立案・制度の運用を実際にする立場になって、現場での課題を発見したり、そこでの課題を踏まえて中央での施策立案に反映したりする際の見方として学べてよかったと思っています。そのような意味で、「総合」ではいろいろなものに関心を持つことと

時に、基本的な視点として自分の中に持てるものを厚く学んでおくことがおすすめです。いずれは自分なりの芯を持つこと。「どこにいるか(地位や肩書)ではなく、何を為すか」が問われていくと思います。それから「警察庁に入りたい」という学生がいればぜひ！警察庁に後輩として入ってくれる人がいればいいなと思っています。

(構成：為谷 磨希)



柔軟に思考し、 成功体験を積み重ねる

塩田 琴美（しおた・ことみ）

総合政策学部准教授

専門分野：リハビリテーション・健康科学・身体教育



塩田先生は以前は医療現場で理学療法士^{※1}をされていた経験をお持ちですが、なぜ理学療法士を志したのですか。

子どもの時からスポーツが好きでした。専門として競泳をやっていたんですが、怪我が絶えず中学時代に競泳を辞めました。それでもスポーツには関わりたくて、スポーツ選手のリハビリや健康管理をするスポーツトレーナーになりたいと考えていました。ですが、スポーツトレーナーの資格を取得したとしても、収入や待遇面での不安定さがあり、コネクションなしではキャリアを継続することが難しいことを知りました。進路について悩んでいた時、両親の紹介で東京都立保健科学大学を知りました。オープンキャンパスでの「スポーツにも関われる理学療法士」という謳い文句に引かれて理学療法士養成コースに入学しました。

●障害を持つ人を地域で支える仕組みをつくりたい

これまでどのような実践や研究をされていたのですか。

私は予防を含んだ、地域包括ケアシステム^{※2}に関心を持っていました。修士課程（病院勤務）の一年目のときに診療報酬の改定があったことが大きく影響していると思います。改定前は、脳卒中などで後遺症が残っている患者さんはリハビリテーションのために二年ほど病院に入院することが一般的でしたが、改定によって九十日での早期の退院が推奨される（早期リハビリテーション加算などの）診療報酬制度が導入されました。地域にリハビリテーションの受け皿がないにも関わらず、日常生活が自立してない患者さんが退院させられてしまうこともありました。当時の理学療法士は、法律上、障害や疾患を持つ方の二次^{※3}・三次

予防^{※4}、退院後のケアはできませんでした。十分なサポートが受けられない環境で生活したことが原因で体力が落ちてしまった患者さんが外来に来ると、自分の無力さを感じました。このやるせない思いから、行政や外部環境を変えられる立場になり、地域単位で障害や疾患を持った人を受け入れられるシステムづくりをしたいと考え

るようになったのです。大学院でも、勉学の傍ら、病院勤務にも励み、障害を持った方の受入れのための地域環境づくりに取り組むことができたのですが、いろいろな課題も見えてきました。自分のスキルや経験に限界を感じ、博士課程に入った後、アメリカへ留学をしました。日本とは異なるシステムを持つアメリカではどのようなサポートがあるのかを知りたいと思ったからです。アメリカでは、患者さんの生活を整えるソーシャルワーカーや退院後の余暇活動を

マネジメントするレクリエーションセラピストという人たちがいて、患者さんの日常生活の悩みやニーズに応えていました。彼らのような役割の人が存在してはじめて、地域に根差したサポートが患者さんに対して提供できると実感し、同様の環境を日本でも整えるため、日本に帰国後、研究を続けました。

どのような学生生活を過ごしていましたか。

大学時代は理学療法士の国家資格を取るため、勉強漬けでした。病院実習が終わっても卒業論文と国家試験が四年生の三月末までありました。ですから、何かに縛られず自分の好きなことができるSFC生が羨ましいです。学生の頃にもっといろいろなことを学びたかったという思いがあります。それでも、学生生活はすごく充実し

ていたと感じます。大学で学んだことが今に生きています。おそらく、人生の中で一番勉強したでしょう。ですが理学療法士になるという目的が明確でしたし、周りに同級生もいましたから苦ではありませんでした。一クラス四十人の中で勉強をし、クラスメイトとはクリスマスパーティーなどもやりました。いまだに連絡を取りあっています。また、縦のつながりも強く、先生方も身近な存在でした。忙しく大変な大学生活でしたが、とても充実していたと感じます。

研究をする上で大切にしていることは何でしょうか。

ひとりの力には限界があります。理学療法はまだまだ認知度が低いので、自ら、さまざまな分野の専門家とのつながりを開拓しています。特に、テクノロジーの力で課題解決ができる事案が多いの

で、工学系の研究者との関係構築は大切ですね。良い関係性を築くために、相手の専門をできるだけ理解した上で相談をするようにしています。

あとは、とにかく現場重視ですね。理学療法の分野は、机上で語るだけで何かが解決するわけではありません。社会で何が起きているのか現場に足を運び自分の目で見えることを大切にし、障害を持つ方々の生の声をきちんと聞くようにしています。

お忙しい中、どのようにしてモチベーションを保っていますか。

現場に出て困っている人の存在を身近に感じることで士気を上げています。困っている患者さんをサポートすると必ず「ありがとう」と言ってもらえます。感謝の気持ちを直接受け取れる職業というのは、意外に少ないのではないで

●魅せられるバラスポーツへ
こみゆスポ研究所^{※5}を設立されていますが、どのようなきっかけがあったのでしょうか。

もともと特別支援学校などで、障害をもった方々のスポーツ参加





が進み、SFCではオンライン体育の開催が予定されていると聞いていますが、すごく面白い取り組みだと思っています。家でスポーツができる環境を整えたり、自分の身体のメンテナンス方法を考えた、楽しみ方が広がりますね。スポーツが苦手だと感じている学生にこそ、自分なりのアレンジを加えてもらい、運動に対する苦手意識を克服してもらうことが重要だと思います。

の促進運動をしていました。「こみゅスポ研究所」として一般社団法人化を進めたのは、二〇二〇年のパリンピック開催決定がきっかけです。東京都などから、障害者スポーツの体験教室を開催してほしいと要請があり、活動範囲を広げる決心をしたのです。障害者スポーツの指導者育成や障害者スポーツの情報提供を行い、誰もが楽しくスポーツに参加できる環境作りを行っていきます。

パラスポーツの認知度を上げるために、SFCで挑戦したいことをお聞かせください。

パラスポーツは障害を持った方だけがやるスポーツではありません。例えば、車椅子バスケットでは、健常者の大学生によって構成されている団体もあります。SFCの学生にもまずは障害者スポーツに参加してほしいですね。体育の授

業の一環で障害者スポーツを教える先生もいて、体験教室も開催されているので、ボランティアとして参加してみるのも良いかもしれません。一度体験をすれば、面白さに気がつくと思います。

SFCでチャレンジしたいこととしては、マーケティングを専攻している学生と、障害者スポーツを「格好良いイメージ」にしたいですね。例えば、楽しい観戦方法を言語化し、魅せ方を変えるところから始めるのはどうかと考えています。

また、障害者の方々の経済状況の改善にも取り組みたいです。障害者が自分の能力やスキルスポーツできちんと稼ぎ、生活を成り立たせるようにしたいです。その為に必要な教育やスキルを本人たちがもっと身につけられたらいいなと思います。こうした課題解決は、往々にして「ボランティア」として取り組まれますが、障

害者自身ももっと稼げるようになるれば、ソリューションに対する対価も正当に支払われるようになり、「儲からない」という負の連鎖が断ち切れるのではないかと思います。障害者のもつ社会課題を扱いながらも自分でマネタイズできる、経済的な価値と社会的な価値の両輪をなす仕組みをSFC生と協力しながら整えたいです。

●体育教育を柔軟に思考する
そもそも運動に苦手意識を持つ学生へどのようなアプローチができますか。

義務教育を含め、今までの体育教育のあり方には疑問を感じています。海外では体育はリベラルアーツと言われていて、もっとクリエイティブなものなのですが、日本では競技スポーツに偏っています。決まったルールがあり、その出来栄で評価されますよね。

ですが本来、スポーツはルールを作るところから始まります。日本でも、「これが楽しいからルールにしよう」という考え方で、自分に合ったスポーツを考える教育があっても良いと思いますね。

そうすれば「環境が整っていないと、スポーツができない」等、固定観念に縛られなくなります。自分が何に興味を持って、身体を動かすのかを考える癖がつけば、運動嫌いの子がいなくなるかもしれません。体育教育には過程の評価の方も重要です。そもそも個人で特徴や技量が違うのだから、その人がどれだけ、どんな風に努力したかを重視して見てあげないといけないと思います。

社会人になると、学校教育で習ったような「みんなで協調性を持つてスポーツをする」機会はなかなかありません。ですから一人でもどうやって運動を楽しむかを考えることが肝心です。コロナ禍

最後に、SFCの学生にメッセージをお願いします。

せっかくなので、いろいろなことにチャレンジしてほしいです。「失敗は成功のもと」というように。若いうちに臆することなく自分のやりたいことを、一つひとつやっていってもらいたいです。小さな成功体験でもいいのです。その体験を積み重ねながら、自分のやりたいことを実現してください。

※1 体の機能改善のため、マッサージ・温熱などの物理療法や機能訓練・歩行訓練などの運動療法を行う専門家。

※2 「医療や介護が必要な状態になっても、可能な限り、住み慣れた地域でその有する能力に応じ自立した生活を続けることができるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される」という考え方に基づいた仕組み。

※3 健康診断などで早期発見・治療を促し病が重症化しないよう処置・指導すること。

※4 治療の過程で保健指導やリハビリテーションを行い社会復帰を促したり、再発を防止したりすること。

※5 障害をもった方のスポーツ参

外出自粛生活の中から気がつく世界

コロナウイルス感染予防対策の影響で多くの方が環境的制約を受けましたよね。「家から出られなくてストレス」や「感染が怖い」と言いますが、先天的に障害を持っている子は、生まれながらに環境的制約がついてくることに気がついてもらいたいです。外出自粛は「環境的制約を受けるってこんなにストレスなんだ」「人に会えない、思うようにコミュニケーションが

取れない、出かけられないってこんなにストレスなんだ。」と障害者の感情を自分ごとに置き換えて共有できる、理解が進むチャンスに変えられるのではないのでしょうか。私たちが普段、何も制約がない環境下では耳も傾けられないことが、実際に自分の行動に制限がかけられることで初めてわかることがあると思います。

加の促進を目指し、スポーツ教室の開催、障がい者スポーツ指導者育成事業や情報提供を行う団体。

(構成：笠井優花)

られないことを志向する人が多いと聞いているので、その志向性を邪魔せずに、学生さんと学びあうことで挑戦していきたいです。先ほどお話しした要介護状態の高齢者を増やさないための支援とは何か、健康寿命をいかにして伸ばすかということは大目標ですが、看護は主にその人らしい生活を支えるということを大切にしています。その支援に今後は、AIなどのICTの導入も考えていく必要があると考えています。まだ研究というレベルにはなっていませんが、現在は山形県内の雪深い地域でAlexa^{※1}を高齢者の自宅に設置し、どの程度Alexaの機能を使いこなせるのかを検討しています。その町ではiPad^{※2}を一度介入を試みたのですが、高齢者は指先の水分量が少なくスクロール操作ができなかったため、使用に至らなかったことがありました。ですが、

ボイスコミュニケーションだと「アレクサ、〇〇を立ち上げて」ということで作動しますので馴染みやすいようです。一方で、山形は訛りが強く独特なニュアンスやイントネーションも違うため、弊害が多少ありました。しかし、何度も話しかけているうちにAlexaが学習してくれるため意外と使いこなせているように思います。今後は介護予防や生活支援に役立つアプリケーションを開発し、実際に効果があるのかを検証していきたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症が拡大している中で、医療従事者への世間の反応について感じていることはあります。

看護師等の医療従事者は実際に目の前に患者さんがいれば命を救おうとする職業ですが、そこが悲

しいことに差別につながっているという話を聞きます。医療現場は確かにハイリスクではありますが、医療従事者だからこそ感染症に関する知識は持っていますし、人に移さないための行動を最大限とっていると思います。医療従事者に差別や偏見の目を向けるのではなく、応援してほしいというのが願いです。

最近「地域包括ケアシステム」という言葉を耳にすることが多くなりましたが、どのようなことをいうのでしょうか。

「地域包括ケアシステム」は、団塊の世代が七十五歳以上となる二〇二五年を目途に、高齢者が住み慣れた地域で



自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、「住まい」「医療」「介護」「予防」「生活支援」が切れ目なく一体的に提供される体制のことです。また、近年では高齢者に限らず、赤ちゃんや子ども、すべての住民を対象

連載 No.33 インタビュー

人との「つながり」から 公衆衛生看護の未来を創る

田口 敦子 (たぐち・あつこ)

看護医療学部教授

専門分野：公衆衛生看護学・地域看護学



●現場活動から見た学問研究の魅力

先生のご経歴についてお聞かせください。

保健師としての経験と看護師経験も少しあります。保健師は世田谷区で働いていました。世田谷区に採用されたとき、同期は一八〇人くらいでしたが、そのうち保健師採用は八人だったと思います。保健師活動はとても面白く感じていましたが、現場に出てから学部で学んだ研究や学問の大切さを感じることも多くなってきました。私が学部の講義の中で面白いと思った研究が、「高層マンションの上の階の子どもと下の階の子どもの運動量や健康レベルが違う」という内容でした。当時の自分にとっては、環境によって人の健康状態が自然と左右されるということが新鮮で、そのようなことを明

らかにできる研究や学問分野に携わりたいと感じていました。

●介護予防を地域に組み込むシステムとは

研究室ではどのような活動をされていますか。

まだ着任したばかりで模索中ですが、前任校の東北大学では介護予防に関わる地域の仕組みづくりをテーマに研究をしていました。介護予防とは日本独特の言葉なのですが、「介護状態を予防する」という取り組みで、高齢者が要介護になるのを防ぐことが目標です。例えば、高齢者が年を重ねていくと、自分でゴミ出しや通院などが難しくなる人もいます。そこを少しでも近所の人やボランティアに手伝ってもらえれば、自宅で日常生活を続けられる人がいるのです。しかし、近年では近所の付

き合いが希薄になってきている中で自然発生的な助け合いに期待することは難しいため、新たな地域の仕組みづくりに向けて、実態調査や介入プログラムの開発に取り組んでいました。

なぜSFCの教員を目指されたのでしょうか。

学業に優れた学生が多く、さらに枠にとられない大学の校風や学生の考え方に惹かれました。慶應義塾大学は自由な校風だと伺っていたので、そのような環境で刺激を受けながら自身を高めていきたいという気持ちでSFCに came しました。

SFCで挑戦してみたいことをお聞かせください。

SFCでは教育も研究も枠にと



連載 No.34 寄稿

「社会を創る側」の 人間として日々行動する

星田 淳也 (ほしだ・じゅんや)

総合政策学部准教授

専門分野：医療政策、社会保障政策、労働政策

星田先生は今年三月まで厚生労働省に勤務されていて、SFCにいらつしやる直前は内閣官房で新型コロナウイルス対策をされていたと伺っています。ご専門の分野は何ですか。

現在はSFCで厚生労働分野のうち労働政策をメインで担当しています（研究会も労働政策ですが、一番の専門は、他国とりわけ途上国への医療制度の展開です。これまでもJICA^{※1}のプロジェクト等に協力してきました。

世界には「まともな医療が受けられるのは富裕層だけ」という国もまだまだたくさんあります。一方、日本の医療制度は、（決して完璧ではないものの）医療のレベル・費用負担の水準・公平性のどの観点からも非常に優れています。各国の文化的事情等もあり、また日本の医療制度は「精緻すぎる」のでこれをそのまま他国に適

用できませんが、それも踏まえてどうすれば他国の医療制度を改善できるのか、これからも考えていきたいです。

ですがせっかくSFCで労働政策を教える機会もいただいたので、今後は医療のみならず、厚生労働分野の政策すべてを途上国へ展開する方策が考えられるようになりたいですね。

●信条として行っていること

ご活躍なさっていらつしやる中で何かこだわりなどご自身で決めた軸などはありますか。

「こだわり」というのは少し違うかもしれませんが、「継続は力なり」を信条としてやっています。

私は新書を読むのが好きなのですが、これまでにざっと一五〇〇冊ほど読みました。こう聞くと学

生の皆さんの多くは驚かれるかもしれませんが、まったく大したことはありません。先生方であれば、「専門書等ではなく新書メインで読んでいて、一五〇〇冊というのは少ないのでは」と思われたでしょう。このギャップはどこにあるか。それが「継続」です。

私は大学を卒業して二十年くらいになりますが、仮に年間八十冊読んだとして、二十年なら一六〇〇冊になるわけです。私のように読書が趣味であるのに、そして一時間で読めるような新書もあるのに、新書を年に八十冊というのは何ら自慢できるような数字ではありません。それを二十年続けるだけでこうなります。学生の皆さんはまだ二十歳そこそこのところから二十年間続けるというのが想像しづらいというだけです。

新書にももちろん当たり外れが

として「地域包括ケアシステム」と呼ばれることもあります。このように広い意味を持つ言葉です。少子高齢社会で、高齢者が生きがいを持ちながら日々を過ごせる仕組みを地域単位でしっかり整備していくことが重要です。地域包括ケアシステムが効果的に機能するために、自助・互助・共助・公助が必要と言われており、その中でも自助・互助を推進することが大切です。互助は住民同士が助け合うことを意味しますが、地域への愛着がないと住民同士の助け合いも起こりません。地域への愛着は大人になってからすぐに育つものではなく、子どもの頃の経験は大きいのです。自分が子どもの頃に地域の人に助けられたり大切にされていたりといった思い出や、地域でボランティア活動をした経験も大事。それがまた次の世代に引き継がれていくのです。地域包括ケ

アシステムは、公的なサービス体制だけでなく、このように長期的な地域の風土や人とのつながりを含めてつくられています。

●「つながり」を育てる保健師としてのあり方

地域とのかかわりが疎遠になってきている日本で、この地域包括ケアシステムを維持していくためにも、これからどのようなことが求められているのでしょうか。

過疎地域の人口減少は深刻な問題です。労働者人口が少なく、医療体制を確保していくことの難しさを感じています。だからこそ、ICTを使って必要な時に医療にアクセスできるような仕組みが必要になってくるだろうと思います。あとは、ただ機械化されるのではなく、お互いが支えあう仕組みが地域の中では必要だろうと

思います。ソーシャルキャピタル^{※2}という言葉がありますが、人のつながりのある人の方がより健康であるというエビデンスもあります。そうした人とのつながりをつくり育てていくことは保健師の重要な役割であり、専門職としてのスキルも必要になります。このような活動も大事にしています。

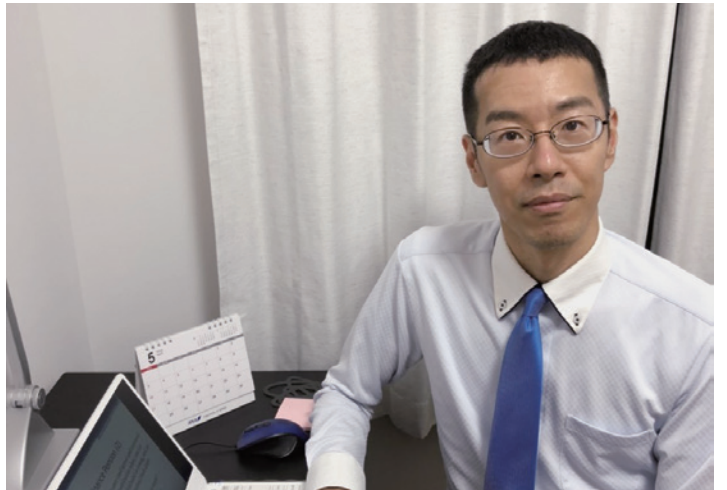
看護医療学部の学生にメッセージをお願いします。

皆さんの自由な発想を大事にして一緒に学び合いたいと考えています。私も学生の皆さんとの「つながり」を持ちながら学んでいきたいと思っていますので、ぜひ地域看護や公衆衛生看護に興味がある人はお声がけください。一緒に学びましょう！

※1：大手通販Amazon社製の音声認識AIAアシスタント。「アレクサ」と話しかけるだけで、音楽の再生、天気のコチェック、テレビや照明の操作など様々なことができる。

※2：信頼関係、規範、相互扶助、人的ネットワークのことをいう。人と人や組織などとのつながりを資本・資源として捉えたもの。

（構成：為谷磨玲）



ありますが、外れも含めてまあ五〇〇冊くらい読めば、世の中の構造がだいたいわかってくると思います。年八十冊程度でも六年ちよいですね。

別の話で、今は平然と英語で授業をやっていますが、私は二〇〇八

年に留学から帰ってきた時には英語はまだ下手で、まったく授業が可能なレベルではありませんでした。その後も英語を継続的にやっただけで今があると思っています。「継続は力なり」とはこういうことです。

●限られた時間の使い方を考える

忙しい中でどのようにセルフマネジメントを行っていらっしゃるのか。

現在、関わりのある先生方のみならず学生の皆さん（このSFC Reviewの編集部の方々も含め）にも泣きを入れていますが、新型コロナウイルスの関係で一歳の長女に保育園登園自粛をさせている結果、私が月から水、妻が木金、い

ずれもほぼワンオペ育児をするようになっていきます。（土日は分担して二人でみるという形です。）妻も仕事がありますが、私は木曜日に研究会二コマ、金曜日に副担当の授業一コマ、主担当の授業一コマ（社会保障・GIGA^{※2}）を持っていて、木金は妻に見てもらっているわけです。

学生の皆さんで経験された方は少ないでしょうが、一歳児の世話をする人間は、子どもが起きている間は世話以外のことは本当に何一つできません。なので、授業や研究会の準備は長女が寝ている間に行わざるを得ませんが、長女が一歳児にしてはショートスリーパーなので、一緒に寝ると朝四時半に長女に起こされたりして相当睡眠時間が削られています。ただでさえ、初めて大学の授業を担当する方はほぼ「講義資料はその週に作る」という自転車操業になる

ようですが、私の自転車操業は次元が違います。毎週毎週、本当に間に合わないかもしれないのに、準備に割ける時間が非常に限られている。これ以上睡眠時間を削ればたぶん翌週には倒れる。そんな状態です。このSFC Reviewの一時間のインタビューすら、いつ時間がとれるかわからないので一度はお断わりした次第です。

セルフマネジメントとしては、他に方法がないので、倒れない程度に睡眠を削りつつ、基本的に趣味や息抜きの時間をゼロにしておいています。これが三年続くとしんどいですが、まあ数か月だから耐えられると思ってやっています。オンラインとはいえ多くの学生の皆さんと接してやりとりできる仕事なのでそれ自体が息抜きにもなっています。あと、今年三月に内閣官房でコロナ対応をしていた時よりは一兆倍マシです。あの

時は二週間で「まったく歩けなくなった」、つまり廊下を歩いていると横の壁にぶつかるようになりました。

なお、現在は睡眠時間が減り自分の時間はまったくありませんがそれ以上に、子育ては楽しいです。これは若い皆さんに声を大にして伝えたいです。子育てが、子どもの成長を見るのがこんなに楽しいとは思いませんでした。

学生へのメッセージをお願いいたします。

これは研究会の学生にも伝えましたが、今SFCにいる皆さんは「社会を創る側」の人間です。それを自覚し、日々行動していただきたいと思っています。

そもそも学生である現在でも、皆さんの行動の一つ一つ、たとえばリツイートの一つ、いいねのク

リック一つであっても、それらは世の中に影響を与えます。すでにサイトは閉じられたと思いますが、話題になった「漫画村」で違法にアップロードされた漫画を読めばそれだけで、アップロードした者が得をするという形で実際に社会を動かしています。「自分一人くらい何をしても何の影響もない」ということはありません。それを踏まえ、自分の行動にどういう影響があるか、また自分はどういう社会を望むのかを考え、それに沿って日々の行動を決めていただきたいと思います。

何より、大学を卒業して社会人になった暁には、何か不都合があった時に「このような社会が悪い」ではすまない。皆さん自身が疑う余地もなくその責任を負う立場になります。その自覚を持っていただきたいです。社会を変える、一ミリでも望ましい方向に導くと

いうのは、いちいち大変ですがそれだけの価値があるタスクです。（個人的な話ですが、私自身は、「社会の在り方に責任を持った発言がしたい」ので役人になりました。社会の在り方について次世代に対し責任があるのは役人でなくても同じです。）

一緒に社会をよりよくしていくことはありませんか。また皆さんには、私の後の世代として、私たちの世代が退場した後も引き続きよりよい社会を築いていただきたいと思っています。



※1: JICA (Japan International Cooperation Agency)

国際協力機構。発展途上国に対し資金、技術、人材協力などの援助を行う。

※2: GIGA (Global Information and Governance Academic Program) は核となるすべての授業が英語で行われる学部課程プログラム。学部卒業に必要な単位（二四単位）をすべて英語の授業で取得可能。



連載 No.08

わたしの推薦図書

宮代 康文
(みやしろ・やすたけ)総合政策学部准教授
専門分野：政治哲学、フランス哲学・思想『日和下駄 ～ 一名東京散策記』
永井 荷風
(講談社文芸文庫、1999年)

三田でフランス文学を講ずる教授である。年齢は三〇代半ば。森鴎外や上田敏に推挽されて一九一〇年に文学科教授になったが、この本(初版は一九一五年)を出版してから三ヶ月後には辞職してしまふ。子どもの頃から散歩をするのが好きだった。晴天用の下駄を履き、いつも傘を持って出かける。当時東京に居たフランス

人神父たちは、散策に出る際、天気が良くても傘を携えていたらしい(秋庭太郎『考証 永井荷風』)。とはいえ、その頃の日本人としては約一八〇センチと背も高く、何かと目に付くようにも思えるこの先生がいつも傘を手放さないのは、湿気の多い東京の天気を信用していないからである。「変り易いは男心に秋の空、それにお上の

御政事とばかり極ったものではない。なるほど、少し調べればわかるけれども、この教授は浮気性の人だった。

永井荷風はアメリカとフランスで長い海外生活を送った。その彼が帰国後に東京を歩き回って書き留めたのは、ご当地グルメのことでもなければ、地元の人とのほっこりとする触れあいでもない。それらはお散歩番組に任せておこう。『日和下駄』で描かれるのは、たとえば淫祠(お稲荷様や大黒様などのほくら)、樹木、寺院、川、路地、空き地、崖、坂、夕日である。明治維新から数十年の月日が過ぎ、欧風の都市づくりに人々の目もなじんだ頃であるにちがいないのだが、荷風に言わせると、「如何に無聊なる閑人の身にも現今の東京は全く散歩に堪えざる都会」である。「現代日本の西洋式偽文明」は「無味拙劣なるもの」である。荷風は「裏町」を、「横道」を歩む。そこにこそ、まがいものに翻弄されることなく、調和の取れた美がろうじて生きのびているからである。

『日和下駄』のライトモチーフ

は調和の美であると思ふ。ちぐはぐなものは、それが最先端の代物であったとしても、生活の画趣を壊してしまう。路地の光景は、けっしてお上品なものではない。しかし、荷風の眼と耳を芸術的な興味で満たすには充分である。

路地は公然市政によって経営されたものではない。都市の面目体裁品格とは全然関係なき別天地である。されば貴人の馬車富豪の自動車の地響に午睡の夢を驚かさるる恐れなく、夏の夕は格子戸の外に裸体で涼む自由があり、冬の夜は置炬燵に隣家の三味線を聞く面白さがある。新聞買わずとも世間の噂は金棒引の女房によつて仔細に伝えられ、喘息持の隠居が咳嗽は頼まざるに夜通し泥棒の用心となる。かくの如く路地は一種云いがたき生活の悲哀の中に自から又深刻なる滑稽の情趣を伴わせた小説的世界である。而して凡て此の世界の飽くまで下世話なる感情と生活とは又この世界を構成する格子

戸、溝板、物干台、木戸口、忍返など云う道具立と一致している。この点よりして路地は又渾然たる芸術的調和の世界と云わねばならぬ。

町の木々についても同じだ。初夏の晴れた日、続く瓦屋根の合間に、銀杏や椎、榎、柳の梢が新緑に彩られ、陽の光に照らされる様には「東京らしい固有な趣」がある。秋になり、黄葉した銀杏の葉が神社仏閣の白壁や朱色の欄干と織りなす眺めは「最も日本らしい山水を作す」。近頃は、ヨーロッパの都市の外観を真似ようとして、楓や橡が街路に植えられるようになった。紀伊国坂の光景は不調和の最たるものである。「赤坂離宮のいかにも御所らしく京都らしく見える筋堀に対して異国種の楓の並木は何たる突飛ぞや」。不忍池の弁天堂や石橋は、上野の山の杉や松、また池に咲く蓮の花と見事に調和している。「これ等の草木と此の風景とを眼前に置きながら、殊更に西洋風の建築又は橋梁を作つて、其の上から蓮の花や緋鯉や亀の子などを平気で見てい

る現代人の心理は到底私には解釈し得られぬ処である」。

荷風は、明治に始まった近代化という名の欧化を嘆きつつ、江戸の滅びゆく「静寂の美」が醸し出す情緒の残り香にすがりついているのだろうか。そういう節もある。ただ、近代化を進めれば必ず不調和に陥ると考えていたわけでもなさそうだ。隅田川の河口付近には「荷船の帆柱と工場の煙筒」が立ち並ぶようになった。その風景の中では、鉄橋として生まれ変わった永代橋も醜くはない。「新しい鉄の橋はよく新しい河口の風景に一致している」。不調和は半端から生まれる。

江戸か東京か、日本か西欧か。このお決まりの話に『日和下駄』がすつきりと収まらない点はまだある。東京の情景の中にも詩趣を帯びたものは残っている。そのようなものに立ち会う時、荷風の心にはフランスの光景がよく蘇る。永代橋の付近は、セーヌ川を往来する荷船の生活を描いた小説(A・ドードー『ラ・ベル・ニヴェルネーズ』)と併せて語られる。神田や牛込の河岸は北斎やミレーを連想

させ、「深刻なる絵画的写実の感興」を誘う。とりわけ印象深いのは、団子坂にある森鴎外宅を荷風が訪れた時の場面である。その二階は観潮楼と呼ばれた(団子坂の別名は汐見坂)。初秋の夕暮れ時、観潮楼には木屋の際立つ香りが漂う。鴎外をただ一人待つ荷風の耳に、上野の深き音色の鐘声が響く。

私は振返つて音のする方を眺めた。千駄木の崖上から見る彼の広漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄に包まれ一面に煙り渡つた底から、数知れぬ燈火を輝し、雲の如き上野谷中の森の上には淡い黄昏の微光をば夢のように残していた。私はシャワンの描いた聖女ジエネヴィエーヴが静に巴里の夜景を見下している、かのパンテオンの壁画の神秘なる灰色の色彩を思ひ出さねばならなかった。

団子坂から見下ろす眺めが、ピエール・ビュヴィス・ド・シャヴァンヌの「眠れるパリを見守る聖ジュヌヴィエーヴ」と重なりあう。パリ

にあるこの壁画は、島崎藤村にも深い影響を与えた(今橋映子『異都憧憬』)。町並みであれ絵画であれ、日本には日本固有の美があり、フランスにはフランス固有の美がある。だがそれでも、各々の美が普遍性を帯びたものでなければ、荷風の心にこのような連想が生まれるべくもない。

荷風の著作には、公正やら善悪やらを授業で云々している身からすれば、いかがなものかと首をかしげたくなる箇所も多々ある。情景描写にセンチメンタルな言葉が縷々と連なることも稀ではない。「廃滅のロマンチズム」(川本三郎)とは言い得て妙であるが、このロマンチストを特徴づけるのは、映る対象を「情緒化する眼」(遠藤周作)である。「ああ、世に寂寥ほど美しいもの有之候や。寂寥は唯一の詩神に有之候」(『ふらんす物語』)。情緒を通して感じ取られる美は、おそらく正義や倫理とは別次元のものなのだろう。しかし、そのような美もまた人間の経験のひとつであると『日和下駄』はつぶやいている。

慶應SFC学会への思い

土屋 大洋 (総合政策学部)



普通の学会は、研究する対象が名称についていることが多いですが、慶應SFC学会は、SFCそのものを研究しているわけではありません。このような名称を付けざるを得なかったのは、SFCが3学部、2研究科で構成されているので、それを一括りにできるよい言葉がなかったのでしょう。本来であれば、学部は学部、研究科は研究科でオリジナリティーを出してやってほしいし、私はやるべきだと思っています。それをフュージョンさせていく場所として慶應SFC学会というのがあるでしょうし、SFC研究所（注）というのもあるのだと思います。

（注）SFC研究所：慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部、健康マネジメント研究科の附属研究所であり、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにある。

脇田 玲 (環境情報学部)



学会とは学術的な活動の場を指す言葉ですが、古色蒼然とした学会像はSFCには似合いません。権威的なアカデミズムから脱却し、新しい知のあり方を模索すること。多様性を尊重し、村社会ではない新しい学術コミュニティをつくること。慶應SFC学会はそのような新しい学会のあり方を模索していく場であって欲しいと思います。そのためにも、論文のフォーマット、学会発表のスタイル、査読の構造、などに新しい試みが求められます。私も一学会員として何ができるのか、一緒に考えていきたいです。

武田 祐子 (看護医療学部)



慶應SFC学会は、「SFCらしさ」「SFCとは何か」を常に追求されているのだと思います。社会の変化に応じて、最初の理念がどんどん進化をしていくのがSFCらしさでもあるので、そのSFCらしさが反映されている学会なのだと思います。私が常にいるのは信濃町キャンパスですので、SFCからは離れていますが、学生にとっても教員にとっても看護医療学部がSFCにある影響は大きいです。今後とも発展してほしいですし、自分たちもそれに貢献できるような活動ができたらと思っています。



慶應SFC学会

慶應義塾大学湘南藤沢学会は
令和2年4月1日より慶應SFC学会に
名称変更しました

会長：池田 靖史 (政策・メディア研究科教授)



このたび湘南藤沢学会から慶應SFC学会に名称を変更しました。前会長の桑原武夫先生（総合政策学部教授）の頃からの議論を経て、意見収集にもある程度の時間をかけて、いよいよ変更に至りました。それは活動内容を刷新するためでも、これまでの名称と活動の実態が著しく異なるためでもないと認識しています。それではなぜ名称変更するのかと言えば、発足から30年を経て、領域横断的でありつつも共通の学問的な進取の気心と地球社会的な人間観に支えられた「SFC学」が醸成されてきたという自覚が背景にあります。異分野融合的学術コミュニティであることの価値を「SFC」という3文字に込めてアイデンティティーにしたいと考えたのです。

慶應SFC学会 活動紹介

慶應SFC学会は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにある学部と大学院研究科の研究・教育活動を促進し、SFCらしい学問的な関心について、学外を含む交流のネットワークを形成することを目的とした組織です。研究・教育活動の成果の発表や、社会へ向けてのメッセージを発信するための各種出版物刊行のほか、会員が企画・主催する研究ネットワーク活動の支援や、SFCらしさを育む研究活動の表彰や支援を通じ、共に学術的な進歩とその社会的貢献を目指すコミュニティを維持していきます。

KEIO SFC REVIEW



「KEIO SFC REVIEW」は慶應SFC学会*が発行している、SFCのオフィシャル広報誌です。SFCのキャンパス紹介をはじめ、教員・学生の最新の活動内容を掲載しています。また、卒業生やSFC関係者とのネットワーキングを支援する役割、さらには研究機関としての大学から社会へ向けてのメッセージを発信する意味を込めて1997年より刊行しています。

*慶應SFC学会とは
2019年度までは湘南藤沢学会と呼ばれていました。原則として湘南藤沢キャンパスの3学部・2研究科の学会員で構成され、学術雑誌であるSFCジャーナルの発刊、研究助成金事業、学術交流大会、各種出版物発刊、等の活動を通じ、SFCの研究・教育活動の支援をしています。



comment1

誰かに届けるための文章を書いてみたい、文章を書くことが好き。いろんな方と出会う、話を聞いてみたい。繋がりが欲しい。そんなことがきっかけで私はSFC REVIEWに参加いたしました。学生生活に意義を見いだせる場です。誰もがきっと活躍できます！輝けます！思い出の1ページを紡ぎましょう。
笠井 優花(総合政策学部4年)

comment2

人のことばを形にして、たくさんの人に伝える。それが編集の醍醐味だと思います。人の話を聞くのが好きな人、文章を書くのが好きな人、何かひとつのものを形にしたい人そんな人たちと、ぜひ一緒にSFC REVIEWをつくりたい。一緒にまだ見ぬ誰かに向けて、人のことばを伝えてみませんか？
菅沼 啓紀(総合政策学部4年)

comment3

興味ないな～と思ったあなた。待ってください！私も最初同じ気持ちでした。そんな私が今ではここで書く立場に。それほど、学びが多く楽しく充実した経験になるんです。できなくていい。好きじゃなくてもいい。でも今ここで挑戦した時、新たな世界が見えるのは保証します！そのあなたの一步を私達は待っています！
芳賀 瞳子(環境情報学部3年)



ひとつでも当てはまる方！
雑誌作り未経験者の方でも大歓迎です！

たくさんの先生の話を聞きたい

写真を撮るのが好き

雑誌を眺めるのが好き

企画を考えるのが好き

文章を書くのが好き

デザインに興味がある

SFCが大好き！

「KEIO SFC REVIEW」はSFCの学生主体で編集しています。雑誌作りに必要な、企画・取材・執筆・デザイン・写真などを学ぶことができます。各号発刊される毎に編集費(謝金)をお支払いいたします。やる気あふれる学生さんのご参加をお待ちしています。

comment4

高校生だった私にとってSFC REVIEWは憧れの大学と繋がる媒体でした。穴が開くほど読んでいたことを思い出します。このメディアはSFCを志す人をはじめ、先生方や在校生、卒業生などSFCに関わる多くの世代と「今」のSFCが繋がる場です。SFCの「今」と魅力を一緒に発見し、伝えていきませんか。
山田 璃々子(環境情報学部2年)

comment5

いつでもどこにいても、誰もが気軽に膨大な情報にアクセスできる時代。今私たちが大切にすべきものは何でしょうか。あなたが考えに考え抜いて、話者の熱意・想いを読者に届けたい、と試行錯誤すればするほど言葉自身が語り出すのを感じられることでしょう。この本を手にとったあなた、一緒にそんな世界に誘われてみませんか。
為谷 磨玲(環境情報学部2年)

comment6

「SFC REVIEW?そんなのあるんだ!面白そう!やってみたい!」私はその思いだけで編集員に応募しました(笑)。どんな人が運営していて、どんな事ができるのか、何もわからないまま参加しましたが、今では自分の衝動のままに動いて本当に良かったと思える場所です。SFC REVIEWに少しでも興味があれば、ぜひあなたも編集員に！
飛弾 香花(環境情報学部2年)

▼ お気軽にご連絡ください ▼

「KEIO SFC REVIEW」編集部
E-mail:keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp



学生編集部員募集

「KEIO SFC REVIEW」を一緒に作りませんか？

From editor

慶應SFC学会

発行人 池田 靖史 (会長／政策・メディア研究科教授)
担当幹事 秋山 美紀 (環境情報学部教授)
 東海林 祐子 (政策・メディア研究科准教授)
事務局 田坂 真美

編集長 笠井 優花 (総合政策学部 4 年)
副編集長 山田 璃々子 (環境情報学部 2 年)
編集委員 菅沼 啓紀 (総合政策学部 4 年)
 芳賀 瞳子 (環境情報学部 3 年)
 為谷 磨玲 (環境情報学部 2 年)
 飛弾 香花 (環境情報学部 2 年)

協力 (KEIO SFC REVIEW 卒業生)

足立 諒子 (2008 年 総合政策学部卒業)
 亀井 茉莉 (2008 年 総合政策学部卒業)
 北本 かおり (2003 年 総合政策学部卒業)
 中澤 仁美 (2007 年 環境情報学部卒業)
 百谷 伶奈 (2007 年 総合政策学部卒業)
 松田 麻希 (2006 年 総合政策学部卒業)
 安井 元規 (2004 年 総合政策学部卒業)

皆様、70 号をお手にとっていただき誠にありがとうございます。

はじめに本誌の発行が遅れましたこと、編集部を代表しお詫び申し上げます。

今号より編集部は全学生メンバーが入れ替わり、今回編成されたメンバーは皆、編集の仕事がはじめてでした。慣れない仕事で戸惑うことも多い中、先生方やいままで SFC REVIEW を支えてきた先輩方からの多大なるお力添えを頂きこのように無事発刊できたことをとても嬉しく思います。

コロナウィルス感染対策のため、取材・打ち合わせ・校正など全ての作業をオンラインで行い、編集部員は未だ対面の活動ができておりません。SNS や画面越しで編集作業を重ねる中で、言葉のニュアンスや意図を正確に共有すること、対面せずに協働することの難しさを身をもって感じました。一方で、これからの時代はオンラインのみで人間関係を構築することも当たり前になっていく、そのことを避けて通れないようにも思います。

コロナ禍で今号を編集して改めて感じたのは、どんな時代にあっても新たな課題は次々と生まれており、「問題の発見・解決」をモットーとする SFC 生である私たちは、それら新たな人間関係構築方法をはじめとした、様々な社会課題に取り組む姿勢を忘れてはいけないということです。学部長や新任教授へのオンライン取材を通して、改めてそれを肝に銘じ、本号は「いかなる状況の下でも私達にできることはある」ことを表現したつもりです。

本誌をお手に取っていただいた皆様の一人一人が「未来の担い手」として重要な存在であることを心に刻み、どんな時でも歩みを続けるための足掛かりになればという期待を込めて発行いたします。

最後になりましたが、取材・編集にご協力いただいたすべての方に心より御礼申し上げます。

2020.9.27 笠井 優花

発行日 2020 年 10 月 30 日
発行所 慶應SFC学会
 〒 252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322
 0466-49-3437
<http://gakukai.sfc.keio.ac.jp/>
keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp
印刷 株式会社ワキプリントピア
 〒 252-0815 神奈川県藤沢市石川 6-26-19
 0466-87-5811
<http://www.printpia.co.jp>

無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應SFC学会までお寄せください。